

4部門別の研修で

2013年JAPE春季幼年教育研修会開催

◎設置者・園長・後継者研修 ◎主任・リーダー研修 ◎教員研修 ◎新任教師ゼミナール(3日間研修)

2013年3月25日～26日 ◎ルビノ京都堀川



恒例のJAPE春季幼年教育研修会が京都にて開催されました。昨年は休講になりました「教員研修」を今年は開講し、昨年新たに開催した「主任・リーダー研修」と「設置者、園長、後継者研修」「新任教師ゼミナール」の4部門研修となりました。

全国からご参加いただいた多数の先生方全員の4部門での全体会で開講しました。

開講式の後、滝沢武久当会理事長（国立大学法人電気通信大学名誉教授）の基調講演「ピアジェ理論に基づく幼児教育の展望」、（講演内容を次に掲載）当会教育顧問を3月末で退任される中川登美子先生の退任記念の「幼児教育にあこがれ 燃えて学んだ50年」と題した特別講演と続きました。

楽しい講習で評判の中川先生らしく、会場の緊張をほぐすため、全員で幼児の歌を歌ってからの講演開始でした。中川先生の幼稚園教諭時代、当会講師時代、短大講師と兼務の時代、当会教育顧問の時代と幼児教育一筋に情熱を傾け歩いてこられた、50年の中での保育の具体的な事例、幼児の変化の様子、各地での研修会で先生方にしてこられた指導の一旦、また、訪問講習の中から生まれた各地の実践研究グループの話し、長い歴史の中で築いてこられた幼児教育の実践研究成果等々、予定の時間内ではとても収まらず、質問時間を使っての熱の入った講演でした。これからは自分の後を継いでもらえる講師を育てていきたい、と締めくくられました。

2013年
JAPE春季幼年
教育研修会
基調講演

ピアジェ理論に基づく幼児教育の展望

滝澤武久

当会理事長・国立大学法人 電気通信大学名誉教授

日本でピアジェ理論が導入され、その発達理論が教育現場で重視されるようになってから、ほぼ半世紀が経ちました。その間、不十分ながらも従来の詰め込み主義の教育から脱皮し、子どもの主体的な活

動を重視する教育を尊重する方向に進むようになりました。現代教育のこの動向の貴重な理論的支えの提供者の一人として、常にピアジェの名があげられています。にもかかわらず、ピアジェ理論を教育の

中で具体化しようとしても、学習全体を覆いきることはできず、限られた教科のごく狭い分野の学習に適用するだけで済ませてしまっていることが多いようです。幼児教育の実践についても、同様なことが言えます。

実は、ピアジェが幼児教育について論じた独立の著作は、一つもないのです。彼の研究目的は発達過程そのものを明らかにすることなのであって、それに伴う教育的示唆は行っても、教育学を体系的に構築しようと言う意図まではなかったようです。それでも、教育学に関する論文集は発行されていますし、邦訳もされています。

「ピアジェの教育学 — 子どもの活動と教師の役割」 (ジャン・ピアジェ著 芳賀純ほか訳/三和書籍 2005)

しかし、幼児教育については、ほとんど言及されていません。この意味で、ピアジェ理論にとって幼児教育は未開拓の場でした。しかし幼児教育の場は、学校教育の場と比べて、子どもの活動面でかなり余裕があるので、ピアジェ理論を実践する機会に恵まれているはずですが。

実際、幼児教育の分野でピアジェの行った実験を応用することのできる場面が殊に多いことに目をつけたアメリカの教育界では、ピアジェ理論によるカリキュラムの開発が盛んでした。その代表が、カミイらの「幼児教育カリキュラム」です。カミイは、かつてしばしば来日して、幼児教育の実践研究との関連で、ピアジェ理論に触れながら講演や指導を行いました。

「ピアジェ理論と幼児教育」

(C.カミイ著 稲垣佳世子訳/チャイルド本社 1980)

確かにピアジェは、子どもが知識を獲得していく過程に、大きな関心を向けていました。知識の教え込みを排し、自分で試したり、予想したり、質問したり、友達の考えに反論や同意をしたりする自由な



能動的活動をしながら、知識を自ら構成していくことの大切さを説き続けていたのです。この場合、知識の性質に応じて、その知識を構成する仕方が異なるわけですから、それに応じて教師の対応の仕方も異なることとなります。ピアジェによれば、3種類の異なった知識があります。

1. 物理的知識（感覚や運動を通して知る知識）

物（ボール、磁石、鏡など）を振ったり、叩いたり、押ししたり、落としたり、投げたりして、その結果、物はどう反応するかを知って得られる知識です。

2. 論理・数学的知識

（具体物の操作や思考操作を通して知る知識）

具体物を通して、または自分の内面の思考だけで、分類したり、比べたりするなどの操作をすることによって、得られる知識です。この場合は、自分の持っている知識との関連で、知ることとなる知識ですから教師が教えるだけでは得られません。ここでも、子どもの自発的活動が必要です。

3. 社会的知識（意見を交わしたり人から教えられたりすることにより得られる知識）

規則や習慣など社会の中で得られる知識です。

ピアジェ理論をそのまま教育実践に当てはめようとする試みは、アメリカで流行していますが、この本のように、ピアジェ理論における知識の種類に応じた指導のあり方を探っている説明は、画期的です。

「ピアジェ理論と幼児教育の実践」上・下
(R.デ・ブルーズ/L. コールバーグ著 加藤泰彦監訳
北大路書房 1992)

この本の副題は、「モンテッソーリや自由保育との比較研究」となっていますが、原著名は、「幼児期教育のプログラム」で、その副題は、「構成論の視点」です。ここで、ピアジェ理論を「構成論」と位置づけていることは、ピアジェの発達心理学の立場を明確に示した用語として注目すべきでしょう。

ピアジェ理論は、思考構造の発達段階を探求した研究でも示されるように、発達を「構造の変化」（構造化、構成）としてみえていく立場（「構造主義」「構成主義」）に立脚しています。この点で、思考構造を先天的な性質と見る在来の「構造主義」学説とは、まったく異なっています。

「構造主義」（ピアジェ著 滝沢武久ほか訳/白水社1970）

「知能を育てる100の遊び」

— 幼児教育へのピアジェ理論の適用 —

(G.フォーマン他著 高橋晃訳/八千代出版1994)

この本の原題は「構成遊び—幼稚園でのピアジェの応用」とされているように、ピアジェの構成理論から導き出された100以上もの簡単なゲームが、取り上げられています。子どもが問題解決活動を含む遊び体験からどんな意味が構成するかについて、きめ細かく解説されているので、ピアジェ理論の実践書として最適です。

「ピアジェの発達理論と幼児教育」

(竹内通夫編著/あるむ 1999)

著者のアメリカでの研鑽をもとに執筆された本です。おかげで、アメリカでのピアジェ研究の現状が、手に取るようにわかります。また、本書の中でピアジェ理論にもとづいた幼児美術教育論は、特に力作であり、一読の価値があるでしょう。

「ピアジェ理論からみた思考の発達と心の教育」

(滝沢武久著/幼年教育出版 2011)

ピアジェ理論にもとづいて、幼児の思考や言葉の発達の特徴を概観するとともに、情操教育や感性の教育などいわゆる「心の教育」の重要性に言及し、幼児期の最重要課題である「自立」への道を探ります。これらの著作を通して、ピアジェが学校教育に求めた教育方法の原理（子どもの主体的活動を重視する教育。ピアジェはこれを活動主義教育、能動主義教育とよんでいます。）がそのまま、幼児教育にも適用されると見ていいでしょう。その教育の要点は、以下の6点に絞ることができます。

1. 子どもは自由な自発的活動を通して発達していきます。
2. 子どもは身の回りの環境と相互作用しながら発達していきます。
3. 子どもは自分で探索した知識を巡って、その考えの過ちに気づき、それを自ら修正しながら、発達していきます。
4. 子どもは誕生以来身体を使って考えます。
5. 子どもの思考は「感覚運動的知能」の働きから出発し、子どもの活動体験を通して、安定性と柔軟性を持った「操作的思考」へと、各発達段階をたどりつつ、歩みを進めていきます。

幼児期は、操作的思考期の前段階にある「前操作的思考」期にあります。

6. 各段階の思考構造は、前段階の思考構造を基盤としながら、子どもの活動を通して作られていきます。したがって、子どもに必要なのは、各段階を確実に踏み締めていく活動です。言い換えれば、ピアジェ理論に基づく教育とは発達を促進させる教育ではなく、発達の基礎を固める教育なのです。

発達の基礎を固めるということは、子どもがそれぞれの年齢段階で、習得すべきことにじっくりと取り組み、知的好奇心や達成欲を最大限に働かせることです。ピアジェ理論は、子どもの思考の発達をたどってこのことを明らかにしたのです。